

10年前のわたしへの手紙

「結婚する人しか、紹介しないって決めてんねん。」これは、昔よく親へ使っていたセリフだ。2つ下の弟、4つ下の妹が次々と彼女、彼氏を家に連れてきているにも関わらず、長男の私はそんな素振りを見せることはなかった。しかしながら、「彼女いるの？」と両親に尋ねられていたわけではない。むしろ両親は、ありがたいことに私の思うがままに行動させてくれるとても理解のある人達だ。ではなぜ、そのような“言い訳”のようなセリフを使っていたのか。それは、10年前、18歳の私は“自分自身が”ゲイであるという事実を全くもって受け入れられていなかったからだ。自己の肯定として、両親にそのように言っていたのだ。

-自分が自分を否定する-

人生で一番辛く悲しいことの一つではないかと、思う。当時の私には、「ゲイ」という言葉はとてもネガティブなものに聞こえた。普段接している友人達と、自分は違う。みんなと違う。頭では女性を愛したいのに、心で好きになるのは男性。当時の私は精神的にとっても苦しかったのを覚えている。

18歳といえば、大学1年生である。高校2年生(16歳)の時の初恋の相手(※男性。ここで自分がゲイだと確信する)を2年経った当時も引きずっていた。同じ部活の一つ下の後輩。彼の一挙一動全てが輝いて見えていた記憶がある。さらに、大学生活というものは高校生活とは違った「自由」があり、様々な新しい出会いがあった。「やめとけ」と今なら確実に思うのだが、どうしても近くにいる男性に好意を抱いてしまう。(周りの友人にタイプイケメンが多かったからかもしれない。笑)。自分のことを受け入れられていない上、同性を好きになり、誰にも相談できない当時の状況は、まさに負のスパイラルであったように思う。今考えても、その心境の中でよくぞ乗り切ったと自分で自分を褒めたい。

では、いつ、今こうして過去の自分への手紙を書くことができる心境になったのか。

それは、つい数年前のことである。2013年4月(当時25歳)、オーストラリアのシドニーへ大学院留学のため渡った。そして忘れもしない2014年12月の真夏(オーストラリアは南半球なので季節は日本と逆である)のシドニー。とある日偶然、欧米の若い有名人2人がカミングアウトしている動画を見た。これが最大のきっかけとなり、何年間も

悩んでいた自身の性指向を受け入れることができた。当時の自分よりも年齢が若いその二人の有名人は、カメラを前に、自分がゲイだと堂々と宣言していた。自分がゲイとわかったときの気持ち、中々周囲に言えなかったこと等、日本人でない彼らも同じ気持ちで苦しんでいた時期があり、そこを乗り越えてその動画をアップしていた。その彼らの勇気ある行動と同時に感動したのは、彼らの家族、友人、そして彼らのチャンネルのほとんどの登録者から、支持されていたことだ。私はようやくあのとき、自分はなんて小さくバカバカしい悩みを持っていたんだと思うことができた。

自分がなりたいと思えるロールモデルを持つということは、私の人生の特効薬となった。腫れ物に触るように扱っていた「ゲイ」という事実が、自分にとって輝き出し、無限の可能性を秘めていると思えるものに変化したのだ。

その後、2015年7月(27歳)に日本へ帰国し、家族や友人たちにカミングアウトをしてみた。家族はとても温かく、また、友人たちも(とくに男友達には伝えるのが怖かったが)、「早く言えよ！」とばかりに全てを受け入れてくれた。そこからの人生は、プラスに捉えられるようになった。嘘をつくことなく過ごせる日常に、大変感謝している。「彼氏できた？」と聞いてくれる友人たちには大変感謝している。時代は良い方向に変わっているとつくづく感じる。当時10代の自分では全く想像していなかった未来が今、目の前に広がっている。一歩を踏み出すことが何かを生み出すことを知った。

全ては巡り合わせだと思っている。私が自分を受け入れ、周囲にゲイと認知された上で生活できているのは、シドニーでの何気ない生活の中で見つけた二つの動画から来たものだ。

それとまた同時に、たまたま英語や海外の文化に興味があり、実際に足を運んだからこそ得た奇跡だとも思う。自分の経験が全ての人に当てはまるとは思わないが、当時あれだけ自分を否定していた私が、今こうしてこのような文章を書くに至ったこと、今悩んでいる若いみなさんの何かのヒントになればと、心から思う。

なおき(28歳)

